

# NEC ネッツエスアイが選んだ ITトレーニングとは？ 検証環境「ラボ」で実践的なスキルを習得

ネットワークをコアとした ICT システムに関する企画やコンサルティング・設計・構築を展開するシステムインテグレーターである NEC ネッツエスアイ株式会社では、先進技術の有効活用が重要なミッションとなっている。昨今は、クラウド移行やコンテナ化、IT インフラの自動化といったニーズが高まっており、顧客が求めるシステムを提供するためには新たなスキルの習得が不可欠。こうした状況に対応するため、同社では Red Hat トレーニングを導入して実践的な技術の習得や認定資格の取得に取り組み、顧客の要望に応えられるエンジニアの育成を図っている。

本稿では、Red Hat Learning Subscription (RHLS) を受講した NEC ネッツエスアイソフトウェア開発部の森一樹氏にお話を伺い、Red Hat トレーニングの大きな特徴である検証環境「ラボ」や実践的なスキル習得のポイントについて確認していく。

NECネッツエスアイ株式会社  
デジタルソリューション事業本部  
スマートインテグレーション事業部  
ソフトウェア開発部 主任  
森一樹 氏



## クラウドベースの「ラボ」を提供し、 実践的なトレーニングでスキルアップを図る

幅広い業種のシステムインテグレーションを手がける NEC ネッツエスアイでは、5 年ほど前から Red Hat の認定クラウド & サービスプロバイダー (CCSP) として、Red Hat 製品の活用を推進している。CCSP のパートナー契約には、Red Hat の認定資格取得が必要となることもあって、会社主導で Red Hat トレーニングの導入を決定。NEC グループが目指す高い技術力を用いたサービスの提供というミッションに携わってきた森氏も、Red Hat との付き合いは長く、自身が参画したプロジェクトで Red Hat Ansible (IT インフラの自動化を実現する構成管理ツール) を利用していたことをきっかけに、技術力の向上を目的に Red Hat トレーニングの受講を開始した。

「受講する前は、LPIC の学習プログラムのようなイメージを持っていましたが、実際に受講してみて印象は大きく変わりました。各コースがしっかりと作り込まれているのはもちろん、実際に手を使ってハンズオンでトレーニングが行える環境である『ラボ』が用意されていて、実践的なトレーニングでスキルを習得できることが大きな魅力と感じました」

IT 関連のトレーニングでは、検証環境の構築が大きなハードルとなると森氏。クラウドベースの「ラボ」が最初から提供されているのは、Red Hat トレーニングならではの大きなメリットと語る。さまざまなトレーニングコースと認定試験に対応した Red Hat Learning Subscription (RHLS) を受講した森氏は、法人向け Linux ディストリビューションである RHEL (Red Hat Enterprise Linux) をはじめ、Ansible や OpenShift のトレーニングの受講を進めていったという。

「2020 年に入ってコンテナ技術を扱う事業部に異動し、初めてコンテナに触れました。当然ながら他のメンバーはコンテナを扱えるので、いかに早く追いつくかが重要でした。『コンテナを知る』ところから始めなくてはならず、Red Hat のトレーニングはコンテナをキャッチアップするまでのペースを速めるという意味において大変役に立ちました」と森氏。現在は OpenShift の認定資格をはじめ、

Kubernetes の CKA/CKAD も取得するなど、専任メンバーを追い越すほどのコンテナ技術が身に付き、周りからの評価も変わってきたと話す。

森氏が Red Hat トレーニングの受講を本格化したのは 2019 年の 6 月。そこから 1 年半ほどトレーニングと各種認定試験を行い、RHEL、OpenShift や Ansible の認定資格を取得し RHCA に認定された。「受講のベースは、平日の業務後に 1 時間ほどインプットメインのトレーニングを受講、週末はアウトプットでハンズオンを 3 時間ほど行いました。ハンズオンはまとまった時間がないと難しいので、週末に行なうことが多かったです。Red Hat トレーニングではコースの冒頭で詳細な説明があり、その内容を理解して進めていくことでスムーズにスキルが習得できるので、難しいと感じたコースはほとんどありませんでした」

現在は、顧客からのニーズが高まっているコンテナ (OpenShift) に関連した分散ストレージソフトウェア「Ceph (セフ)」やマイクロサービス間の通信を管理する技術となる「サービスメッシュ」のトレーニングを受講するなど、エンジニアとしてのさらなるスキル向上に取り組んでいるといいます。





## 技術が「わかる」だけでなく、技術を活用できるトレーニングを実現

Red Hat トレーニングには、クラウドベースのラボを利用したハンズオンのほか、インストラクター指導によるライブトレーニングをインターネットを介して行うバーチャルトレーニングも用意されている。さらに認定資格試験が実技形式となっているなど、非常に実践的なトレーニング方式を採用している。

「他の認定資格は、テキストを読んで理解し、説明ができるなどを問う問題が多いのですが、Red Hat の認定資格は実技試験がメインで、実際に使えない場合も合格できません。エンジニアに求められるのは技術が『わかる』ことに加えて、技術の活用が『できる』ことだと個人的に感じており、できることを証明する Red Hat の認定資格には大きな意味があると思います」と森氏は話す。オンラインで実践的なスキルを習得できる Red Hat トレーニングを高く評価する。

森氏は、Red Hat の製品・サービスを活用するためのスキルを自主的に習得できる RHLS を、新入社員の教育用としても好適と評価している。

「新入社員の教育は詰め込み型が多く、現場に入ってみると言葉はわかつても実際にサーバの設定方法で悩むことがあるように感じています。Red Hat トレーニングのハンズオンで、実際にサーバの設定などを実践していれば、先輩の手を借りることなく、ある程度のサーバ設定を自主的に行えるため、新入社員の自信に繋がると考えています」

森氏の部署では、すでに実践的な取り組みとして新入社員に Red Hat ラーニングを受講してもらい、RHEL や OpenShift の認定試験に合格するなど期待どおりの成果を得られているという。

さらに森氏は、サブスクリプションで柔軟なコース選択が行える RHLS は、新入社員だけでなく専門分野の技術力を高めたいすべてのエンジニアにとって価値があると力を込める。

「RHLS はスキルパスが提供されており、技術力を延ばしたい分野に合わせて選択することで効率的なトレーニングが行えます。弊社では、コンテナ技術や自動化のスキルアップを目的に、OpenShift や Ansible といったコースの受講を推奨しており、現場で活躍しているエンジニアの資格取得数も増えています」

## チーム単位での受講やコミュニティへの参加でモチベーションを更に高める

オンラインで提供される RHLS は、コンテンツのアップデートも頻繁に行われるため、最新技術への対応も容易。ライフサイクルの早い Red Hat 製品を扱うエンジニアにとっての価値は高い。森氏は、Red Hat トレーニングをスムーズに進めるポイントとして、複数のメンバーでの参加をあげる。

「1人で行うオンライントレーニングは、モチベーションを保つのが難しい側面があります。チームメンバー全員が受講していれば、ハンズオンで感じた疑問もメンバーに質問して解消でき、皆と一緒に取り組んでいるという意識がモチベーション維持につながると思います」

Red Hat の CCSP である NEC ネッツエスアイは Red Hat 製品を業務で使うことが多く、特に RHEL、Ansible、OpenShift は利用頻度の高いソリューションと森氏。その認定資格が取得できることも、Red Hat トレーニングを続ける大きなモチベーションになっていると話す。森氏自身は、社外のコミュニティイベントに参加し、第一線で活躍している参加者からよい刺激を受けることで、モチベーションを維持しているという。

「トレーニングを受講する気が起きない時期は定期的にありました。その際は Ansible もくもく会や、OpenShift Meetup などのコミュニティに参加することで、やる気をもらっています」

オンラインで多様なコースを受講でき、「ラボ」によって実践的なトレーニングが行える Red Hat トレーニングは、NEC ネッツエスアイを含む NEC グループのエンジニア全体のスキルアップに大きく貢献している。森氏は「今後はコンテナセキュリティを受講する予定です。OpenShift に関するスキルもまだ弱いので、関連トレーニングを受講し強化していきたいと考えています」と個人的な展望を語るとともに、NEC グループ全体の技術力向上に Red Hat トレーニングを活用していくべきだと期待を口にする。

ビジネスの展開に先進技術の活用が不可欠となった現代において、顧客のニーズに応える技術力を実現するため、積極的に最新端のトレーニングを利用する NEC ネッツエスアイのビジョンは注目に値する。Red Hat 製品を扱うすべてのエンジニアは、今後も注視していく必要があるだろう。



## NECネッツエスアイ

### NECネッツエスアイ株式会社

本社：〒112-8560  
文京区後楽 2-6-1 飯田橋ファーストタワー

事業内容：ネットワークをコアとする ICT システムに関する企画・コンサルティングや設計・構築などの提供、および日本全国にわたるサポートサービス拠点による 24 時間 365 日対応の保守・運用、監視サービスならびにアウトソーシングサービスの提供